

## 読書史の中の読書画像

安形麻理\*(mari@slis.keio.ac.jp), 石川透\*, 上田修一\*, 田村俊作\*, 瀬戸口誠\*\*

\*慶應義塾大学文学部, \*\*梅花女子大学文化表現学部

【抄録】読書する人を描いた図像(読書画像)は、読書の実態を知るうえで貴重な資料である。本研究では、独自に収集・データベース化した読書画像を用いて、読書史が描き出してきた読書行為がどのように、またどの程度まで読書画像に反映されているのかを検討した。その結果、読書史による読者・読書の類型と読書画像は完全に対応しているわけではなく、読書画像が常に実態を反映しているわけではないことが確認された。

### 1. 読書画像<sup>1</sup>

読書する人を描いた絵画、挿絵、彫像などの図像(以下「読書画像」)は、しばしば読書史や書物史の傍証として引用されてきた。近年、ヨーロッパにおいては読書や書物を描いた絵画を集めた展覧会が開かれるなど、読書画像そのものへの関心が高まっている。さらに、ここ数年の間に、女性を描いた読書画像を対象とする研究が各地で始まっている。

なかでも、読書画像に早くから着目していた Fritz Nies は、19 世紀前半に描かれた多数の読書画像(特にフランスの風刺画)を対象に、読者の性別、姿勢、読む対象、読書の場所など多様な観点からの分析を行っている<sup>2</sup>。

読書画像は、読書の実態を知るうえで非常に貴重な資料である。一方、風刺や教化など、特定の意図をもって描かれる読書画像もあると予想されるため、全ての読書画像を読書の実態の忠実な反映だととらえると問題が生じる可能性がある。しかし、読書画像と読書史との対応関係については、従来あまり研究が進んでいない。

本研究では、読書史が描き出してきた読書行為がどのように、またどの程度まで読書画像に反映されているのかを検討する。そこから読書史と読書画像の関係を明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究手順

(1)主として西ヨーロッパの中世以降を対象とした読書史研究から時代ごとの読者・読書の類型を明らかにする。代表的な読書論として『読むことの歴史』<sup>3</sup>、*Book History Reader*<sup>4</sup>、『読書の歴史』<sup>5</sup>、『文盲と読書の社会史』<sup>6</sup>、『読書と読者』<sup>7</sup>を用

い、必要に応じて各時代についての文献を参照した。日本については『江戸時代の書物と読書』<sup>8</sup>、『近代読者の成立』<sup>9</sup>などを参考にした。

(2)読書画像を独自に収集およびデータベース化し、各画像の読者・読書行為を分析する。

収集・分析の対象は、中世から 20 世紀末までの読書画像である。網羅的な収集を目指すのではなく、よく知られた画像を中心に収集した。具体的には、画集、読書や書物をテーマとする展覧会の図録、読書論の文献の挿絵、絵葉書などから収集した。ただし、受胎告知における読書するマリア像は 15 世紀以降になると極端に数が多いため除外し、サンプルとして数点のみを入れた<sup>10</sup>。

重複や、本が明らかに象徴的な意味しか持っていない画像を除外すると 475 点となった<sup>11</sup>。画像の世紀別の数を第 1 表に示す。10 点の制作年代は不明であるが、いずれも 17 世紀より前である。さらに、参考として約 100 点の日本の読書画像を江戸時代の書物の挿絵や浮世絵から収集した<sup>12</sup>。

第 1 表 世紀別の収集画像数

世紀	13	14	15	16	17	18	19	20	不明	合計
画像数	3	7	70	44	93	64	155	29	10	475

データベースでは、各読書画像について、基本的データとして画題、画家、作成年代、所蔵機関、技法などの情報を収集した。画像分析のための調査項目としては、読書主体の性別と年代、読書対象の数・形態・大きさ、読書の場所(窓辺、野外など)、時(季節や時間など)、姿勢(立っている、座っている、など)、本の持ち方(片手、両手)を設定した。その結果に基づき、象徴的な意味や読書

の実態を分析した。

(3)読書史から導いた読者・読書の類型と読書画像を対照させ、書物史の研究成果も手がかりとしながら、分析を行う。

### 3. 読書論が描く読書・読者の類型

それぞれの時代の読書や読者は画一的ではないが、おおまかな時代区分と読者層は、以下のように類型化することができる。

中世初期のヨーロッパにおいては、修道士(男性)による聖書の霊的な精読と瞑想が行われた。音読が主流だが、修道院の発展にともない、音読・瞑想や暗記の助けとしての吟くような音読・黙読という三つの読み方が分化した。

スコラ学時代になり、大学が発展した12世紀以降、哲学者・神学者(男性)による解説や注釈書などの参考図書を使いこなす実用的・技巧的な読書が誕生し、発展した。主として原典の精読ではなく、抜粋の参照が行われる。13世紀以降成立した様々な修道会も、哲学・神学の解釈上の誤りを避けるために選集の製作と普及を推奨した。13世紀末から本の増加や図書館での読書の増加もあり、黙読(と自筆の著述)が確立していく<sup>3</sup>。

中世後期の貴族階級においては、娯楽のための文学作品の読書も行われた。識字能力のない貴族がいる一方で、個人的に黙読を行う者もいた。

印刷術により書物の数が増え、勃興しつつあった市民階級の男性も新たな読者層となる。信心の書や娯楽作品などの分野では、自国語の出版物が増加する。人文主義時代には、古典の復興が行われ、書物の小型化と読書の場所の拡大が起こった。音読が主流であるが、黙読も行われた。

宗教改革を契機にプロテスタント諸国では宗教書や聖書が自国語で読まれるようになる。

18世紀後半には、集中的で反復的な読書(精読)から熱中する拡散的な読書へという「読書革命」が起こる<sup>6</sup>。朗読による社交的な読書と黙読による孤独な読書の二極化の傾向が現れる。娯楽のための読書(小説読書)、特に女性が寝室で行う私的な小説読書が増加する。18世紀末からはロマン主義の影響で野外で読書が行われるようになる<sup>2</sup>。

19世紀には、新聞・雑誌が流行し、女性・子

供・労働者へと読者層が拡大した。

なお、日本では、江戸時代には比較的高い識字率が達成されていた。貸本屋が発達し、一般の町民や遊女の間にも娯楽としての読書が普及していた。音読が主流で、黙読は明治以降に普及した。

### 4. 読書画像の調査結果

#### 4.1. 象徴

書物や読書は、聖性、信仰心、人間の知識の虚しさ、学識などの象徴的な意味が明らかな場合も多い。中世初期から18世紀まで、書物は神学者の図像学的特徴であり、特に十二使徒や福音書家、教父は、神による啓示の擁護者また信仰の代表者として、書物とともに描かれるのが普通であるといわれるが、画像でも確認することができた<sup>13</sup>。

肖像画というジャンルにおいては、書物とともに描かれる男性が多く見られた。書物を持っているだけの場合も開いている場合もある。特に17世紀オランダの肖像画においては、男性は学識の象徴としての書物と、女性は刺繍やレース編みの道具とともに描くことが定式化されていた。こうした肖像画からは、どのように実際の読書が行われていたかを知るのには難しい。

#### 4.2. 読書主体

読書主体は、男性216件、女性259件だった。中世初期には、男性の聖職者、学者、聖人の読書が中心であった。中世後期になると、男性貴族と女性(聖人や貴族階級の一般信徒)の読書も描かれるようになる。特に、15世紀に多数作られた時祷書の挿絵には、私的な読書と集団的な読書、黙読と朗読を聞くという形での読書、さらに糸つむぎや針仕事など女性の日常の仕事とともに行われる読書などの様々な読書が見られた。

なかでも、受胎告知の場面において読書する聖母マリア像は11世紀に定着し、15世紀になるとマリアはほとんど常に書物(時祷書または聖書)とともに描かれるようになる<sup>14</sup>。ただし、直前まで読んでいたことを示す描き方が主流であり、読書の瞬間を描いたものは少ない。

聖マグダラ(マグダラのマリア)も15世紀頃からはしばしば本(大型聖書)を読む姿で描かれるようになる。寝そべった姿勢や、本の上にもたれ

た姿勢が見られるのが特徴的で、中世の読書画像としては特殊である。ただし、時禱書と思しき小型の本を読む端正な姿で描かれる例もある。

17世紀後半、特に18世紀以降には、一般の女性が小説を読んでいる読書画像が増える。しかし、小説読書による堕落への警告という意図が明確に読み取れるものも多く見られた。

#### 4.3. 読書の場所と姿勢

読書の場所は、室内の場合は窓辺が多い。ベッドでの読書は14件あり、ベッドが私的空間ではなかった13から16世紀までは、男性聖職者や王侯貴族がベッドの上または近くで読書していたが(各世紀1, 0, 4, 2件)、17世紀以降は見られなかった。かわりに女性の娯楽的な読書の場として描かれ(各世紀1, 0, 2, 4件)半裸の場合もあった。

野外での読書は57件あった。17世紀までは男女の聖人を描いたものがほとんどであるが、18世紀以降は娯楽のための読書が主流となり、特に19世紀以降は女性読者が増えた(第2表)。

第2表 野外での読書

世紀	13	14	15	16	17	18	19	20	不明	合計
聖人	0	0	4	7	10	3	0	0	0	24
娯楽	0	0	0	0	0	6	15	4	0	25
その他	0	0	2	1	2	1	0	0	2	8
合計	0	0	6	8	12	10	15	4	2	57

読書主体の姿勢としては、座っている(333件)、立っている(75件)の順に多かった。近代以前は跪いている(14件)姿勢があり、近代になってからは寝そべっている(15件)、歩いている(10件)、という姿勢が加わった。

寝そべて本を読む姿勢は日本には多いが、西洋では近代になって登場する。しかし、西洋中世においてもマグダラのマリアのみは寝そべて聖書を読む図像が確認できた(13・16・17世紀)。

対照的に、日本では早くから様々な姿勢での読書が行われていた。しかも、日本独自の読書の姿勢として、「正座前のめり」とでも呼ぶべき姿勢があることが明らかになった。これは、従来、くつろいだ姿勢として言及されているものの、あまり注目されてこなかった姿勢であり、特に名前がついていないようである。しかし、江戸時代・明

治時代の読書画像の多くに共通して見られる姿勢であり、注目すべきだと考えられる。

#### 5. 読書史との関連

##### 5.1. 音読・朗読と黙読

読書画像の分析を行った結果、明らかに朗読であることがわかる事例もあるが、音読や黙読といった区別が明示的に示されている読書画像はむしろ少ないことが明らかになった。1冊の本を二人以上で見ている場合でも、口が開いているという例はほとんどなく、音読・黙読の明確な判断はできない場合が多い。これは西洋においても日本においても同様であった。

プロテスタント国家では、農民や労働者の一家団欒において、父親や夫が大型の聖書を朗読する図像があるが、書物流通の状況を考えると注意が必要である。こうした画像は、実態を示すというよりも、教化を目的とした理想像の反映や誇張表現であると考えの方が妥当である。

##### 5.2. リテラシー

受胎告知での読書するマリア像は、しばしば中世後期の「理想の読者像」を示すといわれる<sup>10, 13</sup>。しかし、書物の画面上の配置から女性の読書に対する警戒や、社会通念との葛藤が読みとれるとする指摘もある<sup>15</sup>。つまり、読書するマリア像が当時の女性の読書の実態を忠実に反映しているとはいいきれない。

さらに、中世の女性のリテラシーについてはわかっていないことも多いものの、様々な段階のリテラシーがあったと考えられること、読書の形態が多様であったこと、ラテン語教育が基本的には特権階級の男性のものであったことなどから、書物を「開いていること」や「読むこと」と、「読めること」や「理解していること」とは必ずしも同じではないと考えられる<sup>16</sup>。同時に、文字だけではなく、図像を読み解く能力の重要性が認識されていたことも考える必要がある。

また、19世紀には一人で物憂げに読書する女性像が数多く描かれた。野外での読書画像も目立つ。これは、読者層の拡大や、ロマン主義の読者の誕生という現象と一致している。しかし、Anna Finnochchi は、読書には日光や灯火といった光源が

不可欠であることから、光と影の効果を描くために好まれた題材であるとも考えられ、必ずしも読書行為の忠実な描写であるとは限らないことを指摘している<sup>17</sup>。

### 5.3. 読書の様式

読書の様式は、精読(瞑想的な読書)、技巧的な読書、拡散的な読書に大別することができる。本調査では、描かれている書物の冊数に着目し、読書の様式の変化を読み取ることを試みた。

読書主体の目の前、机の上、脇などに複数の本が置かれているものは93件あった。中世においては、男性の聖人・学者が机の上や横に書物を広げたり、積み重ねたりしている図像が主流である(15世紀は25件中21件、16世紀は14件中11件)。これは、注釈や索引を活用するスコラ学的な技巧的読書の描写だと考えられる。

近代になると、人の背後や周囲の本棚に多数の書物がある画像は見られるものの、読書主体との直接の結びつきは弱いと考えられる。

18世紀以降の読書画像では、女性が小説と思しき複数の小型の書物と一緒に描かれている場合があるが、小説読書に対する批判・警告などの意図を明確に示しているものが多く、実態の忠実な反映であるとは考えにくい。拡散的な読書への移行は、読書画像そのものからは明確に読み取ることができない場合が多かった。

### 5.4. 描かれにくい読書

飲食しながらの読書や、汚れた手での読書、押し花、余白や白紙の切り取りなどの書物の乱雑な取り扱いに対する批判は、既に14世紀に見られる<sup>18</sup>。しかし、そういった乱暴な読書についての同時代の図像は例外的にしか見られなかった。

近代になると男性のコーヒーやパイプ片手の読書は描かれるようになるが、食べながらの読書画像はほとんどない。何かしながらの読書は、カリカチュアとしての読書画像になる傾向が見られた。実際には私的空間で、何かしながら、くつろいだ読書が行われていたと考えられるが、それを図像として中立的に描写したものは少ない。

## 6. 結論

読書史研究から明らかになっている読者・読書

の類型と読書画像は、必ずしも常に対応しているわけではなく、読書画像が常に同時代の読書の実態を反映しているわけではないことが明らかになった。好んで描かれる読書行為の類型がある一方で、読書画像にされにくい種類の読書行為があることや、読書画像から読書行為を読み取る際に留意すべき点が確認された。

一方では、読書画像における書物の描き方や読者の肉体的な姿勢に着目することで、必ずしも均質ではない読書行為の実態を分析することが可能になると期待できる。

- 1 本発表は、慶應義塾大学大学院 21世紀 COE プログラム人文科学分野「心の解明に向けての統合的方法論構築」による研究成果をもとにしていく。
- 2 Nies, Fritz. "Der Leser der Romantik: Ein ikonographischer Streifzug". Romantik Aufbruch zur Moderne. Maurer, Karl; Wehle, Winfried, ed. Munchen, W. Rink, 1991, p. 511-526.
- 3 Chartier, Roger; Cavallo, Guglielmo, ed. 読むことの歴史: ヨーロッパ読書史. 田村毅他訳. 東京, 大修館書店, 2000, 634p.
- 4 Finkelstein, David; McCleery, Alistair, ed. The Book History Reader. London, Routledge, 2002, x, 390 p.
- 5 Manguel, Alberto. 読書の歴史: あるいは読者の歴史. 原田範行訳. 東京, 柏書房, 1999, 354, 38p.
- 6 Engelsing, Rolf. 文盲と読書の社会史. 中川勇治訳. 東京, 思索社, 1985, 266p.
- 7 Chartier, Roger. 読書と読者: アンシャン・レジーム期フランスにおける. 長谷川輝夫, 宮下志朗訳. 東京, みすず書房, 1994, iv, 464, ix p.
- 8 長友千代治. 江戸時代の書物と読書. 東京, 東京堂出版, 2001, 7, 396 p.
- 9 前田愛. 近代読者の成立. 東京, 有精堂, 1973, 310p.
- 10 石井美樹子. 聖母のルネサンス: マリアはどう描かれたか. 東京, 岩波書店, 2004, xvi, 250 p.
- 11 17世紀に流行した書物を含む静物画も除外した。
- 12 江戸時代の読書画像の多くは、仏教大学の長友千代治先生からご教示いただいた。
- 13 Classen, Albrecht, ed. The Book and the Magic of Reading in the Middle Ages. New York, Garland Publishing, 1998, xlii, 308p.
- 14 Schiller, Gertrud. Iconography of Christian Art. Greenwich, Conn., New York Graphic Society, 1966.
- 15 Linton, David. "Reading the Virgin Reader". 文献 13 所収. なお、美術史では聖母マリアの読書の意味や書物の配置は従来あまり研究対象となっていない。
- 16 Parkes, M. B. "The Literacy of Laity". The Medieval World. Daiches, David; Thorlby, Anthony, ed. London, Aldus Books, [1973], p. 555-577.
- 17 Finnoch, Anna. Lettrici: immagini della donna che legge, nella pittura dell'Ottocento. Nuoro, Ilisso, 1992, 93p.
- 18 Bury, Richard de. フィロピブロン. 古田暁訳. 東京, 講談社, 1989, 216p. (原著 1344 年). 特に第 17 章。